

高卒者調査速報版

「高校卒業後の生活と意識に関するアンケート」調査 にご協力いただいた皆様へ

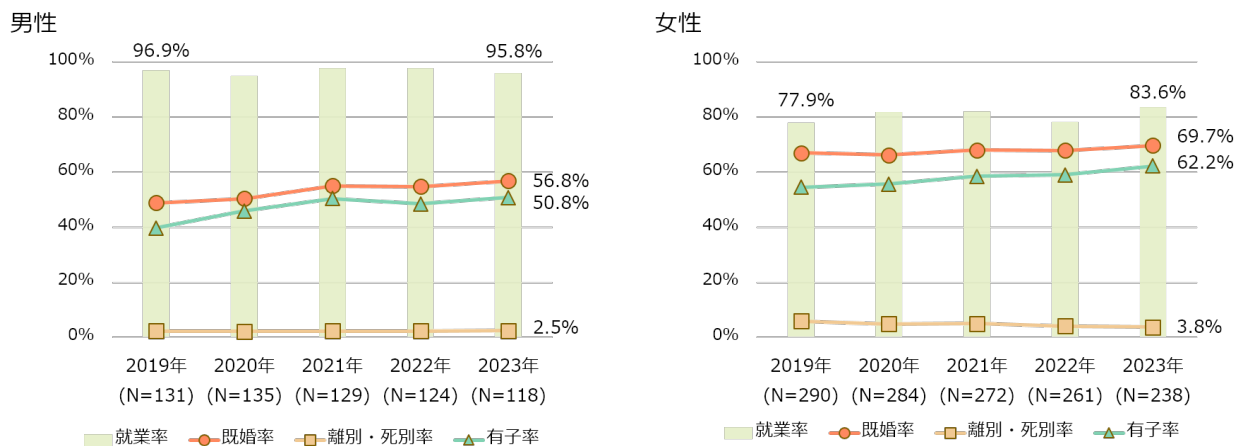
昨年の秋には、第19回「高校卒業後の生活と意識に関するアンケート」調査（高卒パネル調査）にご協力いただき、ありがとうございました。356名（調査時の年齢：37-38歳）の皆様から貴重なご回答をお寄せいただきましたこと、大変有り難く思っております。

遅くなりましたが、昨年度の調査結果の一部をお届けいたします。今回は、独身でいる理由、気がかりなこと、また2018年度から皆様の配偶者・パートナーの方にも併せてご協力いただいております調査のお礼と結果について、まとめております。なお、下記のサイトでは、より詳しい調査結果をご覧いただけます。ご覧いただければ幸いです。

<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/socialresearch/JLPSH/outcome.html>

皆様の高校ご卒業時から開始いたしました本調査も、これまで19回が終わり、本年で20回目を迎える運びとなりました。皆様には長らく本調査へのご支援をいただいておりますこと、改めて深く感謝申し上げます。そして本年の調査にも、何卒ご協力たまわれますと幸いです。よろしくお願い申し上げます。

1. 2019年以降の生活状況の推移



家族形成は落ち着いた状況が継続 そのなかで細かい変化も

2019年から2023年までの5年間の、就業者、既婚者、離別・死別者、子どもがいる人の割合（有子率）を、男女別にグラフにしました。

グラフから、2023年にかけての1年間で、男女ともに家族形成は落ち着いた状況が継続していますが、一定の変化もあったことがわかります。まず男性は、就業率が90%以上で推移することはこれまでと同様ですが、既婚率と有子率はここ1年間で微増しています。それに対して女性は、既婚率は70%前後で継続しておりますが、就業率や有子率にゆるやかな上昇の傾向をみることができます。

2. 独身でいる理由の変化

独身でいる理由の割合に変化がないのは、「必要性を感じない」「趣味や娯楽を楽しみたい」

未婚の方の「独身でいる理由」について、24-25歳（2010年）、25-26歳（2011年）、37-38歳（2023年）の3時点で変化があったかどうかを検討しました。まず、大きな変化がなかった項目を確認すると、「必要性を（まだ）感じない」「趣味や娯楽を楽しみたい」の2つでした（カッコを付している項目は、調査年により設問の選択肢に多少の違いが存在していることを示す（以下同様））。

「必要性を（まだ）感じない」と回答した未婚の方の割合は、24-25歳が32.7%（144名）、25-26歳が31.8%（127名）、37-38歳が33.1%（40名）であり、時点を問わずおおよそ3分の1の方に該当することがわかりました。「趣味や娯楽を楽しみたい」と回答した未婚の方の割合は、24-25歳が26.6%（117名）、25-26歳が27.0%（108名）、37-38歳が26.4%（32名）と、どの時点でも4分の1程度が該当し、こちらも一定の回答の傾向が継続していることが読み取れます。

24-25歳（2010年）の時点から13年間の時が経ち、20代から30代後半に移行しても、結婚する必要性を感じていないこと、趣味や娯楽など自分の時間を確保したいと思うことの2つが、独身でいる背景として、安定して重要な理由になっていることがわかりました。

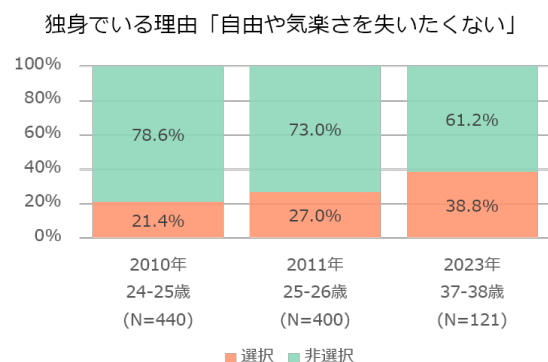
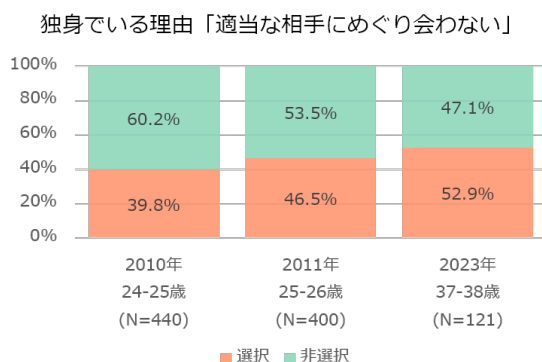
増加したのは、「適当な相手にめぐり会わない」「自由や気楽さを失いたくない」

一方で、24-25歳から13年間のうちに、「独身でいる理由」として回答の比率が増加したのは、「適当な相手に（まだ）めぐり会わない」と「独身の自由や気楽さを失いたくない」の2つの項目でした（下図）。

「適当な相手に（まだ）めぐり会わない」と回答した未婚の方の割合は、24-25歳が39.8%（175名）、25-26歳が46.5%（186名）、37-38歳が52.9%（64名）と増加しており、出会いの機会の多少や出会いの場の有無などの要因が結婚を考える際に大きなハードルとなっていることがわかります。

「独身の自由や気楽さを失いたくない」と回答した未婚の方の割合は、24-25歳が21.4%（94名）、25-26歳が27.0%（108名）、37-38歳が38.8%（47名）であり、こちらも上昇傾向にあります。先ほどみたように、「趣味や娯楽を楽しみたい」ことを理由に独身でいる方の割合は変わらないことから、独身でいる理由として、趣味や娯楽などに費やす時間を減らしたくないという物理的な事情というよりも、精神的・心理的な自由や気楽さを求める方が増えていることが読み取れます。

最後に、減少の傾向がみられたのは、「今は仕事や学業に打ちこみたい」と「結婚資金が足りない」という2つの項目でした。20代から30代にかけてのライフステージの変化に伴い、独身でいる理由にも変化がみられることがわかります。

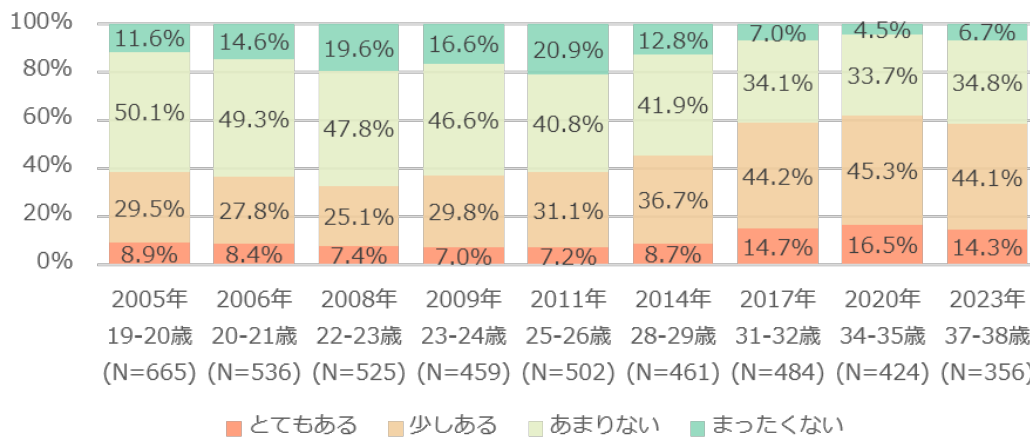


3. 気がかりなことの変化

「家族の介護」は6割程度の方にとって気がかりなことに

19-20歳（2005年）から37-38歳（2023年）までの20年弱で、調査にご協力いただいている皆様にとって「将来を考える上で気がかりなこと」に変化があったのかを確認しました。その結果、2つの項目に大きな割合の増加がみられました。まずは、「家族の介護」です。19-20歳から25-26歳まで、「家族の介護」が気がかりな対象者の方の割合はおおむね4割弱でした。その後、「家族の介護」が気がかりと回答する方の割合は上昇し、31-32歳から6割程度で推移しています。30歳という年齢を境に、「家族の介護」、とりわけ親の介護を気にかける方が増えていることが示唆されます。

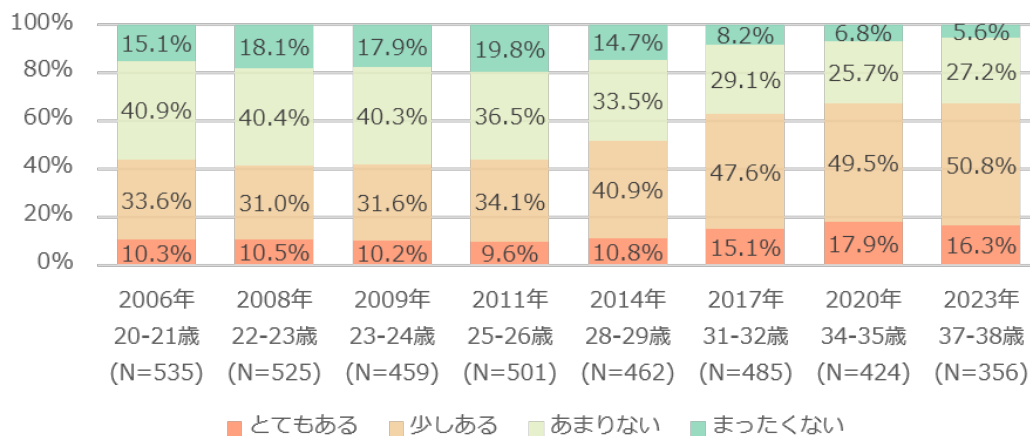
気がかりなこと「家族の介護」



「突然の病気」は7割弱の方にとって気がかりなことに

次に、「突然の病気」です。20-21歳から25-26歳まで、「突然の病気」が気がかりな方の割合は4割強で推移していました。その後、25-26歳から31-32歳にかけて、「突然の病気」が気がかりと回答する方の割合は2割ほど増加し、34-35歳からは7割弱で推移しています。「家族の介護」と同様に、20代から30代になるなかで、自身の健康状態は、多くの方にとって関心を寄せる項目になっていることがうかがえます。

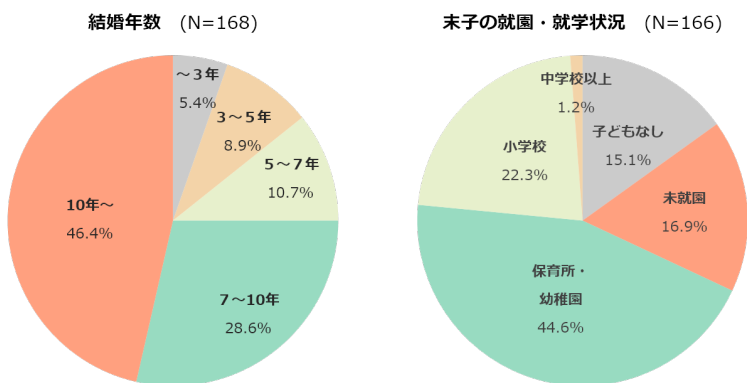
気がかりなこと「突然の病気」



配偶者・パートナーの方々への6回目の調査を実施しました

2018年度から始まった皆様の配偶者の方やパートナーの方への調査（配偶者調査）も、おかげさまで6回目の調査を実施することができました。今回、高卒パネル調査にご回答いただいた356名のうち既婚者（事実婚も含む）は233名でしたが、そのうち72.5%の方々にご協力をいただき、169組のペアデータを収集いたしました。皆様のご協力に改めてお礼申し上げます。これからも夫婦・家族の実態、直面している問題点や課題を掘り下げていきますので、同封の「結婚と日常生活に関するアンケート調査（第7回）配偶者票」を配偶者・パートナーの方々にお渡しくださいますよう、お願い申し上げます。

ご回答いただいたカップルの結婚年数と末子の就園・就学状況

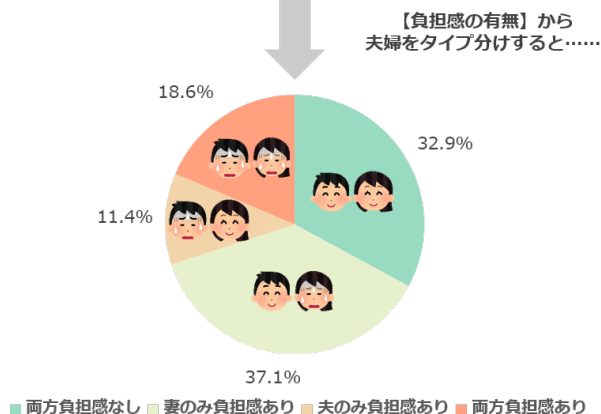
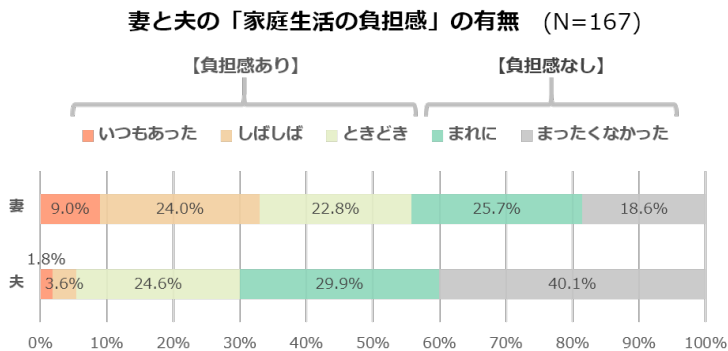


結婚5年以上が8割以上になり、未就学の子のいる家庭が6割超に

結婚年数では最多が「10年以上」で半数近く、次いで「7～10年」が約3割となり、結婚5年以上が8割以上となっています。

また8割を超えるカップルに子どもがおり、末子（一番下の子ども）の就園・就学状況をみると、未就学の子どものいる家庭が6割、小学生も含めると、ほとんどのカップルが「子育て真っ最中」といえそうです。

妻と夫の「家庭生活の負担感」の有無と夫婦タイプ



夫よりも妻のほうに大きい家事や子育てなどの「家庭生活の負担感」

こうした状況をふまえ、過去1か月間に「家事・育児・介護などで負担が大きすぎと感じた」頻度をみました。妻では【負担感あり】（「いつもあった」「しばしば」「ときどき」）が過半数を占めたのに対し、夫では7割が【負担感なし】（「まれに」「まったくなかった」）でした。

そこで、妻と夫の「家庭生活の負担感」の有無から夫婦をタイプ分けすると、「妻のみ負担感あり」が最も多く4割近くを占め、「両方負担感なし」は3割に留まりました。「両方負担感あり」も2割弱を占めるなど、家族形成期の只中で、多くの夫婦（特に妻）は、大きな負担を感じながら暮らしているようすがうかがえます。